News Letter

Center of Research for CMM
第3回　CMMニュースレター

　新緑の美しい季節になりました。今年は春の花の開花が早まったそうですね。GWは藤の花やネモフィラを見て楽しんでいる方もいらっしゃるかもしれません。
　さて、大変遅くなりましたが、ニュースレターとして第３回CMM研究会の活動を報告いたします。

第3回CMM研究会　Center of Research for Creating Music Making
文教大学東京あだちキャンパス　はなはたステージ
令和4年12月17日(土)　14時30分～18時

【第3回　CMM研究会活動報告】

　『「未知との遭遇」が体験できる！～世界の音楽と友達になるために～』をテーマに、全国各地から第一線でご活躍中の著名な実践者及び研究者、音楽之友社、教育芸術社の方など、オンライン参加も含め40名を超える参加者が集い、有意義な時間を過ごしました。

Part1　ワークショップ　『郷土の音楽の魅力に迫る　～「おてもやん」大好き！』
プレゼンター：中島千晴（熊本市教育委員会　教育改革推進課高校等改革室
元熊本大学教育学部附属小学校）

　小学校5年生対象の実践事例を、中島先生が模擬授業的に進めながらお囃子の即興演奏を体験しました。CMM研究会に参加されている皆様の豊かな音楽経験が存分に発揮されて、最後に「おてもやん」大合奏となりました。中島先生は著作権に配慮して「Garage Bandの機能ほぼ全部盛り」の教材をご用意してくださいました。ワークショップ終了後、多くの先生方がデータをAirdropで共有している姿が…今後、現場での実践や題材開発を考える手がかりとなる貴重な資料として、多くの先生方が活用するに違いありません。現代を生きる子どもたちの郷土の音楽の魅力に迫る音楽づくりのあり方を考えるひとときでした。

中島先生より
　90分で熊本民謡『おてもやん』を授業風に丸ごと体験してもらうデザインにしたところ、皆さんとても楽しそうでしたし、最後の即興お囃子を加えたおてもやんの演奏は大変素敵でした。 研修会後に数名の先生方が「おてもやんの歌とリズムって、耳に残りますね」とそれぞれに同じ感想を伝えてくださいました。「おてもやん」がもつ魅力はもちろんですが、聴いて、歌って、つくって、演奏して味わったからこその言葉だと思います。やはり丸ごと体験する意味は大きいと思いました。民謡はある程度定型（規範）がありながらも、自分なりにアレンジできる余白がよいと思います。規範を生かしつつ独自のお囃子をつくるような活動も、音楽づくりの一つの形として、伝統音楽の体験として有意義だと感じました。
　また、参加者の皆さんは「おてもやん」初体験の方がほとんどでしたので、しっかりと準備をすれば参加側のハードルは下げられることも実感できました。音楽的な技能の差はありますが、それは児童生徒も同じだと思います。同様の手法で教材化・題材化すれば、全国どこでも現地の民謡を扱った授業が可能でしょうし、その際に一人一台端末も大いに活用できることでしょう。
　しかし、それには指導者側の研修、準備が相当に必要になると考えます。教材教具の共有、教師間の学び合い、教科書の見直し、大学のカリキュラムの見直し…このような潮流が生まれることを期待しました。

Part2　レクチャーとワークショップ
『多文化音楽研究を現代音楽に生かす！　ー小泉文夫の理論を軸にー』
プレゼンター：加藤富美子（東京音楽大学客員教授）

２つめのワークショップは、民族音楽研究の第一人者小泉文夫先生の愛弟子加藤富美子先生による「アクティブに学ぶ世界の音楽」のレクチャーとワークショップでした。中国トン族の歌を数字譜を見ながら歌う場面では、参加された皆様の歌声が響き、今まで知らなかったなんとも幻想的な味わいが感じられました。そのほか、加藤先生がたくさん持ってきたくださった竹の楽器の数々を手に取りどうやったら音がでるのか試行錯誤していると「その楽器の音をはじめて聞いたわ！」と加藤先生からのお言葉が…正しい奏法でなくても、自分の気に入った音が見つかるまで楽器を自由に触れる時間は本当に楽しいものでした。民族が竹の楽器を演奏している動画の視聴、グループによる即興的なアンサンブルを通して、竹の楽器の味わいのある音色に浸りました。数字で鳴らしたいアンクルンの音の高さを選び、スマホを振って鳴らすことができるアプリ「iAngklung」は、保存が難しい素材である竹の楽器を使う実践の新たな可能性が感じられました。

加藤富美子先生より

『空想音楽大学』『おたまじゃくし無用論』ほかセンセーショナルな表題の著書などを通して、学校の音楽教育が、こどもたちの持つ多様な音楽性に目を向け、より自由でより創造的であることを願い続けた小泉文夫。その精神はまさしく、CMM研究会がめざすところと重なっていたのだと、当日のミニワークショップを通して深く感じ取ることができました。
たとえば、ミニ題材例「竹はなんでも楽器店」では、「第１回アジア伝統芸能の交流（ATPA）（1976）」で紹介されたフィリピンのカリンガ族の竹の楽器を使って遊びました。会員の小さなお子さんが、私が宝物にしている、もっとも響きがいいバリンビンを離そうとせずずっと音を楽しんでいた姿、演奏のしかたがわからない楽器から見事な響きを生み出し、音楽づくりをしてくださった会員の方々。
小泉文夫がめざした、「自分の表現したいことを音楽で表す主体的な音楽性や，世界中の音楽のよさを感じとれる豊かな感受性の育成」の姿そのものを眼のあたりにすることができ、CMM研究会から多くを学ばせていただいた会となりました。

Message

諸民族の音楽を学ぶ意義について　ー「バイリンガル教育」の視点から

Understanding Other Ways of Life:Engaging with Multicultural Music

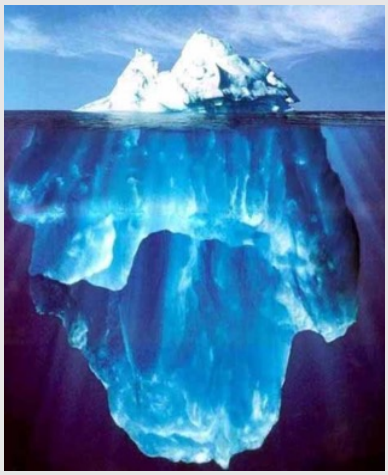
近藤真子（文教大学准教授）

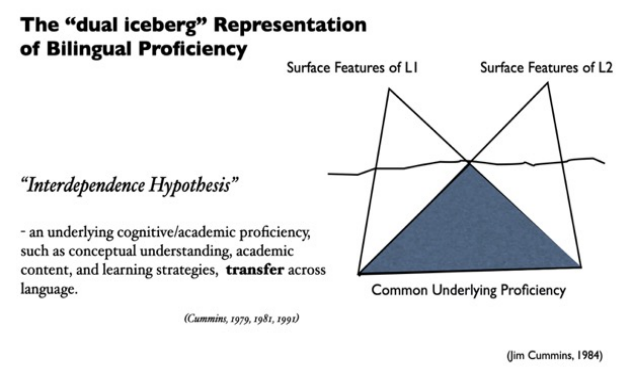
日本の音楽を扱うと西洋の音楽の力がつかないのか？英語を学ぶと日本語の力が劣る？など、相反するものを習うことの良し悪しが議論された時代もありました。しかし、バイリンガル教育学者であるトロント大学のジム・クミンズ教授（1980年）の研究成果を音楽教育に応用して考えると、我が国や世界の諸民族の音楽を、授業に取り入れる意義がみえてくるように思います。

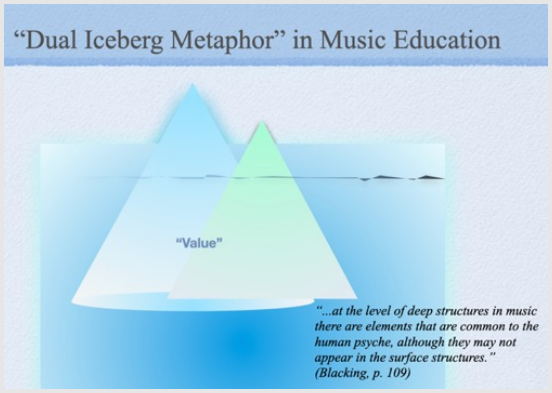
つまり、表面には現れない、水面下の言葉の意味や概念、感情なども含めた目には見えないものは、第1言語・第2言語間で共有することができるというDuel Iceburg のメタフォアーです。Unfamiliar culture（あまり馴染みのない文化）や音楽と自分がもともと持っている音楽の理解が関連づけられた場合、相乗効果があり、水面下の理解が深まります。すなわち様々な音楽のジャンル、伝統音楽に取り組むことで聴く力も含めて音楽力全体の能力がアップする（氷山の水面下の部分がさらに厚くなる）、音楽的表現がもっと豊かになったり、他の創造的な新しい価値を生み出していく可能性があるのではないかと考えています。

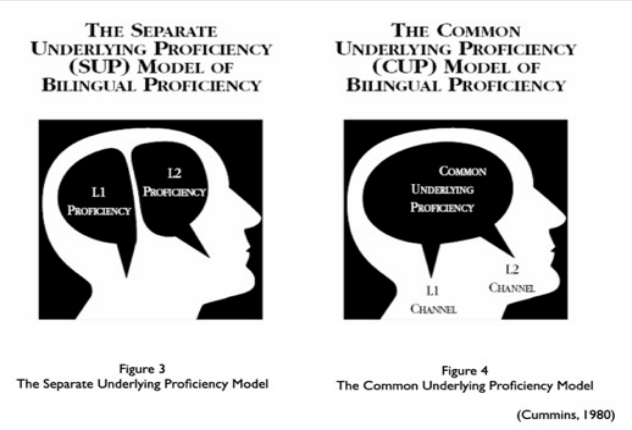
今回は、色々な音楽に触れていただきました。実際に、子供たちにとってあまり馴染みのない音楽（ともすると日本の音楽でさえも）と、どのような出会いチャンスをつくれるかは、とても重要なことです。（新しい音楽の世界の扉をあける瞬間）は、今後も我々の課題です。

今日の研究会が、先生方のヒントになり実際に取り組んで頂けたら嬉しいです。









Center of Research for CMM

第3回　CMMニュースレター

参加者の感想：
改めて、今回の研究会の内容の濃さ，深さに感激しております。私自身，世界の音楽や日本の音楽、音楽づくり日頃の子供たちとの実践において，捉えきれていなかった真の学習の意味や意義を教えて頂き、大変大きな気づきと共に勉強になりました。

日本や世界の音楽を別々のものとし遠い存在だと思い込んでいましたが、ルーツや音楽的な特徴の共通点があったりと、驚きと発見とともに改めて、伝統音楽や様々な国の音楽を扱う題材構成の重要性や可能性を実感しました。
また、お二人の先生共通に「主体的・アクティブな学び」の重要性を述べられていました。改めて、その視点の重要性を実感し，今後の授業研究に生かしていきたいと感じました。

＜第4回CMM研究会のご案内＞

ＧＷは、海外からの観光客がたくさん日本にきているとのニュースがありました。対面での音楽の研究会も徐々に増えているようで、とても嬉しく思います。

第４回 ＣＭＭ研究会は、2023年7月17日（月）海の日の予定です。

プレゼンターは、今、現場で大活躍中の筑波大学附属小学校の平野次郎先生と、アメリカで長年音楽づくりの実践をされてこられた文教大学の近藤真子先生。お二人の日米最新情報を踏まえたお話しと子どものやる気が高まる音づくりのワークショップで、皆様と音楽を楽しみ熱く語りあえる機会になりますように…ご参加お待ちしております。

◆お問い合わせ

問合せ・受付担当 ：　岡部 昌代
メール　　：　cofr.cmm.2021@gmail.com

（作成：熊倉佐和子　文責：近藤真子）